

令和2年度第5回茅ヶ崎市市民活動推進委員会 (WEB会議) 会議録

議題	(1) 令和3年度実施市民活動推進補助事業公開ヒアリング 及び公開プレゼンテーション
日時	令和3年3月20日(土) 9時30分から12時30分
場所	市役所本庁舎4階会議室5
出席者氏名	石田貴一 高橋準治 (WEB会議により出席) 柴田春菜 菅原澄江 中野有子 秦野拓也 北川哲也 中川 久美子 山田修嗣 事務局5名(市民自治推進課) 三浦課長、小西課長補佐、遠藤副主査、柿澤主任、勝山主事
欠席者	染谷倫人 米山友哉 弓達茂 矢島啓志
会議の公開 ・非公開	公開
傍聴者数	2名

○事務局

皆さま、おはようございます。本日は、お忙しい中お越しいただきまして、まことにありがとうございます。

ただいまより、令和3年度実施市民活動げんき基金補助事業公開ヒアリング及び公開プレゼンテーションを開会いたします。

本日の司会進行を務めます市民自治推進課の小西と申します。どうぞよろしくお願いたします。

まず、はじめに、市民活動推進委員会の山田修嗣委員長よりご挨拶を申し上げるとともに、各委員をご紹介します。

○山田委員長

皆さま、おはようございます。今日は一日よろしくお願いたします。

ご紹介いただきました山田と申します。委員を代表いたしまして、一言皆さまにご挨拶を申し上げようと思います。

私は普段花粉症で、この時期マスクが手放せないのですが、今年についてはマスクの意味合いも少し変わり、様々な新しい取り組みですとか、新しい日常といったようなものが浸透しています。それだけウイルスの問題というのは私たちの生活を大きく変化させていますが、そのような状態におきましても、こうした市民活動げんき基金補助事業のプレゼンテーションが開催できるというのは、茅ヶ崎市にとって大変よいこと、素晴らしいことではないかと考えております。皆さまに申請をいただきましたことを改めて感謝申し上げたいと思います。

市民活動げんき基金の補助事業ですが、ご存じのとおり、これは茅ヶ崎市の市民活動を大きく推進させるという目的があります。市民活動の活性化を通じて、活力ある、活気にあふれた茅ヶ崎を実現する、目指すということで、茅ヶ崎市として平成17年度から実施をしている事業です。事務局にカウントしていただきましたら、これまでに約160事業に対して財政的な支援をしているということですし、また、こうした財政支援を通じて、多くの団体が活動され、そして、団体としての成長も見事に果たされたということもありまして、市民活動げんき基金補助事業というのは、茅ヶ崎市にとっても大変重要な、大切な事業であるということがわかつています。

令和3年度におきましては、スタート支援に2つ、ステップアップ支援に4つの申請をいただきました。ご提案いただきました事業については、それぞれ皆さまの団体の強みですとか、これから茅ヶ崎市で発揮していきたい、積極的に提案していきたいという活動が含まれている、大変素晴らしいバラエティに富んだ内容でした。

委員は、皆さま方の提案の思いですとか、大いなる積極性といったものを感じながら、今日のプレゼンテーションの日を迎えたという次第です。プレゼンテーションを伺うことを楽しみにしております。

事前にいただきました企画書や本日のプレゼンテーションの内容を踏まえまして、委員から皆さまに対して質問をさせていただきます。繰り返しの内容ですとか、念を押すような質問も含まれると思います。これについては、あまりお怒りにならずに、繰り返して恐縮ですけれども、お答えいただくと大変ありがたいと感じております。

こういった形で積極的にやりとりをしながら、半日ですけれども、良いプレゼンテーションの機会とさせていただきたいと考えております。

あまり長くなってはいけませんので、この辺で挨拶は締めまして、委員を紹介いたします。

副委員長の中川委員です。

続いて、柴田委員。

菅原委員。

中野委員。

秦野委員。

石田委員。

高橋委員。

北川委員。

本日は、以上の委員で進めてまいりたいと思います。皆さま、どうぞよろしく願い申し上げます。

○事務局

ありがとうございました。

本日は、新型コロナウイルス感染症対策のため、原則、オンラインでの開催とさせていただいております。この方法での開催にご協力いただきました、各提案団体の皆さま、市民活動推進委員会委員の皆さま、この場にて改めてお礼を申し上げます。

また、会場にいらっしゃる委員の方、また、傍聴の皆さまにおかれましては、マスクの着用やアルコールによる手指の消毒などの感染症対策にご協力いただきますようお願い申し上げます。

また、本日は初めてオンラインでの公開ヒアリング、プレゼンテーションとなります。機器接続の不具合などの可能性も想定されます。どうかご容赦いただければと思います。

また、発表団体との通信が途切れるなど発表が困難となった場合、発表順を入れかえるなどの対応をさせていただく場合もございます。発表団体の皆さまにおかれましては、適宜発表順が繰り上げになる可能性もありますので、その際はどうかご協力を賜ればと思います。

また、本日は、オブザーバーとして、市民活動サポートセンタースタッフの皆さまにもご参加をいただいております。皆さまご承知おきください。

それでは、本日のヒアリング、プレゼンテーションの流れについて、簡単にご説明申し

上げます。

お配りしております緑色の表紙の冊子、1ページ目をご覧ください。

本日、これから12時半ごろまでのお時間で、3年度に実施する市民活動げんき基金補助事業に申請のあった6事業について、ヒアリングもしくはプレゼンテーションを実施いたします。

まず、スタート支援事業の時間配分についてご説明します。

最初に、事業申請団体より5分以内で事業についての説明をしていただきます。

時間管理について申し上げますと、まず、終了1分前にベルを鳴らします。

また、終了予定の5分を経過したところで2度ベルを鳴らします。

説明が終わりましたら、市民活動推進委員会からのヒアリングやアドバイスなどを行います。こちらは10分以内を予定しております。

次に、ステップアップ支援事業の時間配分についてご説明いたします。

最初に、事業申請団体より10分以内で事業についてのプレゼンテーションをしていただきます。

時間管理について申し上げますと、まず、予定時間の半分が経過した5分の時点でベルを鳴らします。

また、次に終了1分前にベルを鳴らします。

さらに、終了予定の10分を経過したところで2度ベルを鳴らします。

こちらでプレゼンテーションが終わりましたら、市民活動推進委員会から質問やアドバイスなどを行います。こちらも10分以内を予定しております。

スタートアップ、ステップアップ支援、いずれも説明中に2度ベルが鳴りましたら、途中であっても速やかに説明を終了していただくようお願いいたします。思いのこもった事業について短い時間でアピールすることは大変なことかとは思いますが、本日の会議の円滑な進行にご協力いただきますようお願い申し上げます。

また、質疑応答の途中でベルが鳴りましたら、その質疑を最後の質疑とさせていただきます。

質問される委員及び回答をなさる団体の皆さまには、1問ずつ、できるだけ簡潔なやりとりをお願いしたいと思います。

皆さまの事業の評価につきましては、市民活動推進委員会が企画書と本日の発表、質疑応答の内容により行ってまいります。

評価項目の採点の基準につきましては、冊子の2ページ及び3ページのとおりです。

満点の60%を採択相当と判断する目安とし、予算額の枠内で、順位に応じて採否を検討してまいります。

3年度実施事業は、市民活動推進委員会による評価結果を受けて、最終的には市長が決定します。採択・不採択等の結果につきましては、事業提案団体の皆さまに書面でご連絡する他、市ホームページ等でも一般に公表してまいります。

既に提案団体の皆さまにはお伝えしていますが、新型コロナウイルス感染症対策のため、評価会議を書面で行うこととしたため、当初予定よりもスケジュールが後ろ倒しとなり、選考結果の通知が4月下旬ごろ、交付が5月下旬から6月上旬ごろとなる見込みです。皆さまにはご不便をおかけしますが、何とぞご理解いただけるようお願いいたします。

また、本日のヒアリング、プレゼンテーションの様子につきましては、スクリーンショットで撮影をし、市ホームページや広報紙等に活用させていただく場合がございます。あらかじめご了承ください。

最後になりますが、この補助金は、市民活動げんき基金を原資とする補助金です。市民活動げんき基金は、市民の皆さまからのご寄附と、その同額を茅ヶ崎市が積み立て、成り立っております。

冊子の6ページから7ページにかけて、これまでにご寄附いただいた方々を記載している他、冊子の背表紙に茅ヶ崎市の体育館に設置されております湘南ヤクルト販売様の自動販売機及び小和田公民館に設置されていますダイードリンク様の自動販売機の売上の一部をげんき基金にご寄附をいただいております。

皆さまからのご寄附がなければ、この補助金はいずれ無くなってしまいます。本日は、原則オンラインの開催とはなっておりますが、市役所の会場内にはげんき基金の募金箱を用意しております。ご来場の皆さまにおかれましては、制度の趣旨をご理解いただき、どうかご協力いただければ幸いです。

それでは、ただいまより各事業のヒアリング及びプレゼンを開始させていただきます。ふらっと茅ヶ崎さん、よろしく願いいたします。

○ふらっと茅ヶ崎（松本）

ふらっと茅ヶ崎の「子どもとワークショップ×おはなし勉強会」という題で始めたいと思います。

まず、目次をお伝えします。

1番目が、市民が元気になるかというところについて、まず、現状をお話ししていきたいと思います。

子育て家庭と時間にゆとりのある市民というのは、今、乖離しているような状態なので、でも、それぞれが幸せになることが地域でできることだと思いますので、その説明をします。

2番目の補助を受けることが事業の発展につながるかということについては、主に後者のほう、ゆとりのある市民の方が意識を少しずつ変えることで、親子のサポーターが増えて、孤育ての解消になるだろうというところですね。孤育ての予防ということは、社会的養護の減少につながる話ですので、その辺の説明をしたいと思います。

3番目、費用が妥当であるかについては、特に、今申し上げた社会的養護というのは、とても社会から見えにくいところに隔離されているような状態にありますので、そのため

には、すごく丁寧に時間をかけて説明する必要があるので、そのための広報費と考えています。

それでは、現状についてお話しします。

このデータは、5年くらい前のデータで、この後のデータも実はとりまして、ピークを見ると、22年度、つまり、2010年くらいがすごく虐待件数が多い時期になります。今の時点では、横ばいというか、少し、このピークよりは下がっているというのが茅ヶ崎の現状ですが、これは全国的に言えることなのです。

なぜ孤育てになってしまったかということ考えたときに、自分の子育てのことを考えると、私にとっては、母がそばにいてくれたから随分助かったなと思えるのですけれども、そういうサポーターがいない方が増えているということで、孤育てにならざるを得ないという現状があると思います。

それをサポートするのは、里親。私も里親をやりましたけれども、そういう里親は地域の資源だと思います。ここに書いているように、里親の研修も少ないので、それを南湖ハウスでやりたいなと思っています。

3番目、これは、うちでもあったようなことですが、エスカレートすると、みんな感情的になって、親は「生まなきゃよかった」とか言うのですけれども、本音はそうではないと思うのですよね。でも、それを言われた子どもは、自己肯定感がなくなっていきます。

現状、4番ですね。

一方で、社会に役立つ資源。祖父母とか、時間のある方がいると思うのです。私だって、私1人ではない、忙しい方だって、そういう時間を見つけようと思えば、出せる部分はあると思うのですね。そういう地域の時間の少しでもそれを子育て中の親とか親子にあげられないかというところで、出会いがないからなかなかそれが難しいので、こういう南湖ハウスを居場所としてつくりたいなと思っています。

南湖ハウスの3本柱です。

そういうことで、今申し上げたような、地域の文化を通して交流をするというこの3本柱ができました。

私たちの思いは、子どもたちのほうを応援したいということで、出会いをつくって関係性を維持して、維持されるための技術を学んでいこうということです。

イベントとしては、このようなお絵描きとか、ポストを製作、おはなし勉強会、こういうイメージで考えています。

以上です。

○事務局

ありがとうございます。

それでは、質疑応答に移りますので、山田委員長、よろしく願いいたします。

○山田委員長

それでは、委員の皆さま、いかがでしょうか。菅原委員、どうぞお願いします。

○菅原委員

大変意義のある活動をされていて、とてもありがたいことだと思っています。

里親活動をしている松本さんに質問したいなと思うことがあるのですが、子どもとワークショップで、子どもだけではなくて、保育士的な若者もサポートをしているのかなと思うのですが、あすなろサポートの情報とかを見ますと、施設を卒園された方と、里親から飛び出した方たちもサポートしているのを見たのですが、施設を卒園された方のサポートというのは何となくわかるのですが、里親から巣立っていったお子さんたちのサポートが必要だというのは、里親さんの苦労とかもあるのかなと思って、里親さんの苦労を少し聞かせていただきたいなと思います。

○ふらっと茅ヶ崎（松本）

里親は、施設と違うところは、1対1というか、家庭対子ということで、そのお子さんが何かトラブルがあったときに、今の状態だと、支援する人が、チームワークでやるべきなのですが、里親個人で負担している話も聞いたりしているのですね。私自身はまだしていないのですが、そのサポートは、社会的養護でもあったので、みんなでやるべきだなと思っています。

里親は、どちらかというと、あまり苦労している話は少なく、実家的に社会的養護を巣立った里子が戻ってくる話はよく聞きますね。だから、そういうつながりを持つということは子どもにとってはプラスだと思います。むしろ施設のほうが私にとっては心配なのですね。以上です。

○菅原委員

まだ話す時間があったら、少し聞きたいのですが、里親のところから巣立ったお子さんたちは、そのような社会的なサポートは必要なくて、里親さんもサポートしてくれているという現状なのでしょうか。

○ふらっと茅ヶ崎（松本）

そういう話のほうは私の周りでは多いですね。

○菅原委員

わかりました。ありがとうございました。

○山田委員長

ありがとうございます。

続いて、質問ありましたらお願いいたします。高橋委員、お願いします。

○高橋委員

プレゼンありがとうございました。これからの社会の中で大事な活動かなと思うのですが、ごめんなさい、率直な疑問で、プレゼンの資料の中にあった「ライト級里親」というのはどういうことなのかなというのと、松本さんのような活動をしている団体が茅ヶ崎市内に他にあるのか。あるいは、今後、そういった団体と連携していくようなことは考えているのかということをお聞かせください。

○ふらっと茅ヶ崎（松本）

「ライト級里親」の話はまだ提案なのですね。今、里親制度というのは、「ヘビー級」と書いたこの部分でしかないのです。下の「ミドル級」というのは、私がやってきた季節里親とか週末里親という、月1回とか、季節なので、年間3～4回、親戚の子どもがうちに泊まるような関係でつながっているという感じなのですけれども、そもそも里親と言われると、うわ、大変ねという方が多いように、ハードルがすごく意識的に高くなってしまっているのですけれども、そうではなくて、日帰りでもいいではないかとか、できる範囲で教えてあげる、こういう関係をつくるのが、先々、子どもが孤立して、今みたいなコロナのときでも、完全に孤立して、若者の自殺がすごく増えているというのですけれども、できる範囲でできることをすればいいのだというふうにみんな考えたほうがいいと思っていますので、ライト級里親を増やそうという。意識のハードルを下げるためのライト級なのです。ヘビー、ミドルとボクシングみたいに例えたほうがわかりやすいかなということの私の提案です。おわかりになったでしょうか。

○高橋委員

よくわかりました。ありがとうございます。

○ふらっと茅ヶ崎（松本）

茅ヶ崎でやっている活動は、この間、居場所づくりネットワークみたいなのをサポセンからご紹介していただいて、そのネットワークに今入ったところで、これから連携していきたいなと思っています。同様の活動をしているところは、私は知りません。里親に関しても。里親会はありますけれども。

○高橋委員

ありがとうございました。

○山田委員長

ありがとうございます。

続いて、質問がありましたら、お願いします。では、中川委員、お願いします。

○中川副委員長

今のライト級のお話を聞いて、とてもいいなと思ったのは、プレゼンを見ていて少し心配していたのは、社会的養護を必要とする子どもを含めた市内の子どもたちということで、このつながりをつくるのがとても大変だろうなと思っていたのですが、ライト級になりますと、それこそ市内の学習支援の活動があったり、居場所づくりがあったり、子育て支援のママさんたちの活動でたくさんあったりするので、そういうものも含めて、地域の中で徐々につながりをつくっていくということで、ご経験を踏まえて、社会的養護の困難性みたいなものも含めて、そういう観点から広がりを持っていくということが大変よくわかりましたので、どうぞ頑張ってください。

○ふらっと茅ヶ崎（松本）

ありがとうございます。うれしいです。

○山田委員長

ありがとうございます。

石田委員が挙手をなさっていたので、どうぞ質問がありましたらお願いします。

○石田委員

私も、質問というか、激励の言葉ですけれども、茅ヶ崎市民の皆さま方は、非常に温和で、人当たりもよく、やさしい方が、私も商売柄、他の市と比べてすごく多いので、この活動がもっと広まって、市民の皆さま方に認識していただいて、健全な子どもたちの成長と、若者の成長に寄与できればと思っているので、この活動、私はすごく支援をするので、本当に頑張ってください。以上です。

○ふらっと茅ヶ崎（松本）

ありがとうございます。少し涙ぐんでいます。

○山田委員長

ありがとうございます。

中野委員、どうぞお願いします。

○中野委員

ありがとうございます。私もずっと松本さんがお話しになっているホームページの記事などを読ませていただいて、素晴らしい活動をされている方だなと思っています。ぜひ頑張ってくださいなと思っています。

社会的養護という言葉自体、すごく難しく、自分事として考えられる人はあまりいななと思って、そこを伝えていくのがすごく難しいと思うのですね。認知してもらうためにどうしたらいいかというのを、多分これから考えられると思うのですが、何か工夫というか、アイデアというか、こういうことをしていきたいということがありましたら教えてください。

○ふらっと茅ヶ崎（松本）

今、当事者の方がすごく元気で、何年か前から発信されているのですね。例えば、YouTubeで、THREE FLAGSという方が、具体的に自分はこのように感じて過ごしてきたとかいう当事者発信をしているので、彼女たち、彼らともつながりを持てるようになってきたので、当事者の方を招くことができるし、今ならZOOMでもお話を直にしてもらえるので、そういう機会をどんどんつくっていきななとは思っています。

○中野委員

ありがとうございます。ぜひつながっていただいて、よろしくをお願いします。

○ふらっと茅ヶ崎（松本）

ぜひ関心を持っていただければと思います。ありがとうございました。

○山田委員長

それでは、質疑応答は以上とさせていただきます。

ありがとうございました。

○事務局

ありがとうございます。

続きまして、スタート支援の2つ目です。「茅ヶ崎市の産後のお母さんのためのポータルサイト」について、ママほぐさんよりご説明させていただきます。

それでは、ママほぐさん、お願いいたします。

○ママほぐ（高村）

「茅ヶ崎市の産後のお母さんのためのポータルサイト」、ママほぐの高村えり子です。よろしくをお願いいたします。

現在、母子を取り巻く環境は、核家族化や地域社会からの孤立、高齢出産の増加など、

大きく変化しており、産後うつや赤ちゃんの虐待死は大きな課題となっています。そのような環境の中、子育てをしているお母さんへ、居場所づくりと産後ケアを通して、孤育てをなくすこと、安心して子育てができるまちになることを目的に活動をしています。

ママほぐの活動は、2つの柱で行っており、1つ目は、お母さんの居場所づくり事業です。ここでは、ものづくり体験と、産後の体のケア、お母さん同士の交流の場を提供しています。これらは、無料の見守り保育と助産師相談が開催されています。

2つ目の柱は、産後ケア事業です。産後ケア事業では、専門家へ相談できる場と、お母さん同士の交流の場を提供しています。産後のお母さんの悩みは細分化されており、助産師だけでなく、様々な専門家が相談に当たります。

昨年、産後6カ月までの子育て実態調査を行いました。茅ヶ崎市では、産後困ったこと、辛かったこと上位に、寝られない、ゆっくり食事がとれない、精神的にふさぎ込むという結果になり、肉体的、精神的負担が非常に大きいということが明らかになりました。さらに、先ほども述べたとおり、母子を取り巻く環境は大きく変化しています。

このような環境は、果たして安全で安心な子育てができるのでしょうか。これまでの対面での事業に加えて、コロナ禍の今こそ、WEBでの支援をあわせた多角的なサポートが必要と考え、ポータルサイトの開設を企画いたしました。

ポータルサイトは5つの柱で構成します。

1つ目は、産後ケアの啓発のためのコラムです。

昨年のアンケートでは、“子育てはお母さんが頑張るもの”という考えが根強いことや、本人がケアを希望しても、家族が理解に乏しく受け入れないケースがあるということから、産後ケアの認知度を高め、理解を深めるための啓発が重要です。

2つ目は、専門家による子育て情報を提供するコラムです。

人と会って相談することが制約される今、ネットで得られた知識に翻弄されるケースがあります。困ったときには、実際に話すこともできる、地域に根ざした活動をしているママほぐの講師が、生きた情報を提供いたします。

3つ目は、開催告知と活動報告です。

4つ目は、子育て情報の可視化です。

茅ヶ崎市は、魅力的な子育て支援団体やサービスがありますが、情報が点在していて見つけにくい状況です。そこで、子育て支援情報を一覧できるページを作成いたします。

5つ目に、賛助会員の募集です。

コロナ禍での開催は、密にならないためのスペースや人件費で赤字が続きました。それを補填するために子育て講座を開催しましたが、十分ではありません。ママほぐを応援してくださる個人、団体、企業にアピールし、賛助会員費を今後も安定して維持継続するための予算にいたします。

新規に立ち上げたポータルサイトによって期待される効果には、産後のお母さんがケアを受けることに対して、本人も周囲の人間からも理解が深まり、地域の専門家からの情報

を得ることができ、子育てに生かすことができる。市内の子育て支援情報から自分の居場所を見つけることができる。ママほぐの事業が安定して維持継続できる。以上のことが挙げられます。

以上をもって市民活動げんき基金補助事業へ応募いたします。ご清聴ありがとうございました。

○事務局

ママほぐさん、ありがとうございました。

それでは、質疑応答に移ります。山田委員長、よろしくお願いいたします。

○山田委員長

それでは、質問がある委員の方はお尋ねください。いかがでしょうか。

では、中野委員、お願いします。

○中野委員

プレゼンありがとうございます。ママほぐさんの活動も、多分多くのお母さん方からすぐ支持されていて、だからこそ、ママほぐさんがこれからつくろうとされているポータルサイトの情報は、すごく信頼のおけるものになるのではないかな、きっと支持してくれる人が多いのではないかなと思っています。

ただ、少し心配なのは、ポータルサイトの運営は、情報を集めたりするのに、人手も手間もかかってしまうので、そのあたりの体制などが大丈夫かなというところを少し心配しています。どれくらいのメンバーで運営をされていてこうとされているのか。どういった情報を重点的に載せようということなのか、そのあたり、もし今わかっていることがあれば、教えてください。

○ママほぐ（高村）

ママほぐは、今、運営にかかるメンバーは4人いて、ママほぐにかかわる講師たち、助産師や保健師を含め、あとは、いろいろな先生たち、大体20人から30人の講師がかかわって協力してくださって運営しています。

今までもママほぐの産後ケア事業とか居場所づくり事業でも、今までの講師の方たちが我々4人の運営に対してすごく協力して手伝ってくださっているというところが非常に大きくて、団体の活動ができているという状態なのですけれども、今後も講師の方たちに、一緒に思いの、孤育てをなくしたいとか、安心して子育てができるまちにしたいという同じ思いを持った講師が集まってくださっていますので、自分たちだけで頑張るのではなく、講師の方々も一緒になって、二人三脚で頑張ってポータルサイトのほうも運営していきたいなと思っています。

提供したい情報に関してですけれども、ママほぐの居場所づくり事業や産後ケア事業に実際に足を運んでもらえれば、そこで講師とお母さんは話ができるのですけれども、その中で特に今月はこういう話題が多かったとか、こういうことを気にしているお母さんが多かったというのが、その時々であるのですね。今だと、コロナ禍だからこそこういう情報が必要だよねとか、こういう情報がないよねというのがあるので、それに合わせて、これを発信しますというのではなくて、その時々に合わせて、お母さんが求めている情報を出していくというのが必要だと思って、それをキャッチする能力というのは、現場があるので高いと思うので、そこでキャッチして発信していきたいなと思っています。

○中野委員

ありがとうございます。よくわかりました。ぜひ頑張ってください。

○ママほぐ（高村）

ありがとうございます。

○山田委員長

続いて質問がありましたらお願いいたします。いかがでしょうか。高橋委員、お願いします。

○高橋委員

どうもありがとうございました。

質問というか、これまで、産後のお母さんのサポートということがメインだと思うのですけれども、私の経験からいくと、旦那のかかわりが非常に大きいと思っておりまして、ぜひ旦那さんの教育もあわせて啓発するようなものを盛り込んでいただけたらいいのではないかなと思います。

今、結構コロナ禍でリモートワークだったり、あえて会社に出勤しないと。月1回とか週1回とか、そのような働き方にどんどん変わってきているので、その辺の部分も、ぜひ旦那を働かせるというのを盛り込んでいただけたらいいのではないかなと個人的に思いました。

以上です。

○ママほぐ（高村）

ありがとうございます。旦那さんの協力だったり、旦那さんの育児参加というか、旦那さんも育児するものですから。というのは、産後のお母さんというのは、母性意識獲得と言うのですけれども、自分がこの子のお母さんで、この子は私の子どもですよというふうに、産んだらすぐお母さんは母親になれるわけではないのですね。自分がお母さんで、こ

の子は子どもですというのを自分の中でどンドン落とし込んでいく作業というのが、産む前からですけれども、産んだ後から始まっていくのですけれども、その中で、父親の愛着形成というか、父親を頼る。自分の夫も育児に参加するということが非常に大事な要素であるというのが研究でわかっているのですね。ですので、ポータルサイトの柱に挙げた、産後ケアの事業の産後ケアの啓発というのには、男性目線で書いてくれる人がいればいいかなと思っていて、男性自身だったり、パパだったり、受けていいですよ、産後ケアを受けましょう、自分たちもやりますにというふうに発信していただければ、すごくありがたいなと思って、「産後ケアの啓発のためのコラム」というのは、そういうところでも大事かなと思って、盛り込ませてもらいました。パパたちの育児を一緒にやっというところを私たちも考えています。ありがとうございます。

○高橋委員

ありがとうございます。

○山田委員長

次に、柴田委員、お願いします。

○柴田委員

質問ではないのですけれども、メッセージでもいいですか。

私も身近なところで産後うつになった方を見ているので、今回のようなこういった活動はすごく意義があるなと思っております。産後うつになってしまったお母さんは、外に出るのも難しくなったりするので、こういったインターネットのサイトで情報が見れたりとかというのは結構重要になってくると思うので、更新するのとか、大変だと思うのですけれども、そういったお母さんに向けて情報があるというのは、本当に助かるというか、自分は産後うつなのだというふうに気づけたりすることもあると思うので、今後の発展も期待しておりますので、頑張ってください。

○ママほぐ（高村）

ありがとうございます。頑張ります。

○山田委員長

ありがとうございます。

中川委員、お願いいたします。どうぞ。

○中川副委員長

私は、オンラインでのメリットとか、あるいは直接対面でやることのメリット、デメリ

ットみたいなのがあると思いますが、一番大事なのは、その状況とといいますか、お母さん自身が本当に知りたい情報が、自分に合ったものかどうかというのを、たどり着くことができるかどうかというところがオンラインではなかなか難しいのかなということを感じているのですけれども、その時、その場で、本当に不安になったり、どうしていいかわからなくなったというような追い詰められた状態があるかもしれないと思うのですけれども、そういうときに、オンライン上で何か応答関係をつくるというのは、なかなか難しいということを感じられていますか。

○ママほぐ（高村）

今までもコロナ禍だと、例えば、インスタグラムのライブ配信だったり、ユーチューブの発信ということで、お母さんとのかかわりを断たないように、去年の緊急事態宣言の中ではやってきていて、それなりに今まで活動してきたこともあって、お母さんの手を完全に放さずにいられたというのは、一つの成果ではあったのですけれども、会って話すというのはすごく大事なのだなというのはとても感じています。

一方で、やっぱり出てこれない。家の外に出るのが怖いというお母さんが、コロナ禍だからいっしょのですね。そういうお母さんに対しては、ここでやっているからおいでよと言っても、なかなか来ることが難しいと思うのです。ですので、サイトの中でいろいろな情報を発信していく中で、自分が、今本当に困っているという情報をキャッチできたとしたら、そのお母さんが、もっと聞きたいと思ったときに、私たちだったら、いるというか、会いに来れるのですね。なので、そういうところが、ポータルサイトはポータルサイトでそこで会うことはできないのだけれども、実際に会うことができる奉仕というのが、ママほぐのポータルサイトの強みなのではないかなと思っています。

○中川副委員長

ありがとうございます。

○山田委員長

質疑応答は以上とさせていただきます。ありがとうございました。

○事務局

ママほぐさん、ありがとうございました。続いて、ステップアップ支援の部です。

「捨てられる動物たちの命を救うイベント『わんにゃんマルシェ』」について、わんにゃんマルシェ実行委員会さん、お願いいたします。

○わんにゃんマルシェ実行委員会（川上）

おはようございます。わんにゃんマルシェ実行委員会の川上と申します。本日は、市民

活動げんき基金補助事業ステップアップ支援のプレゼンテーションの場を設けていただき、ありがとうございました。よろしくお願ひいたします。

本日のプレゼンテーションでは、わんにゃんマルシェとは、わんにゃんマルシェの目的、この活動を始めたきっかけ、今までのイベントの様子、次回のイベントでやりたいこと、目指すことなどをお話ししていきたいと思ひます。

まず、わんにゃんマルシェとは。わんにゃんマルシェは、飼ひ主さんや、これからペットを飼ひたいと考へている皆さまへの動物愛護の心構へなどの普及啓発活動を目的として、定期的に開催されるチャリティイベントです。

わんにゃんマルシェの目的は、平塚にある神奈川県動物愛護センターに持ち込まれる動物の命を救ひたい。募金を募り、保護犬・保護猫を救ひ活動の費用の一部としたい。捨てられる動物たちの現状をもっともって知ってもらひ、その生涯に責任を持つこと、動物を飼ひということをきちんと考へるきっかけにしてほしいという、大きな3つの目的があります。

私たちがわんにゃんマルシェを始めたきっかけは、最初は、平塚の動物愛護センター、昔は動物保護センターと呼ばれていましたが、そちらの建替え基金への寄附を集めるためのチャリティイベントでした。

第1回目のわんにゃんマルシェは、柳島の小さなカフェから始まりました。動物愛護活動にいろいろな形でかかわっている有志が集まり、始めた小さなイベントでした。第1回と第2回は、そのカフェでこぢんまりと開催されました。

第1回目は、東日本大震災で行き場を失った動物たちの保護活動の様子をビデオで流し、保護センターに保護されている動物たちの写真の展示をしました。

第2回は、同じカフェで、期間を1カ月とし、動物をテーマに描いてもらった絵の展示と、期間中にワークショップなどを実施しました。

1回目、2回目と、思ひのほかご来場いただいた人数が多かったので、第3回からは、茅ヶ崎市中央公園へと会場を移し、外での開催としました。そのため、保護団体さんの譲渡会などもできるようになりました。

第4回のときは、茅ヶ崎、寒川の動物愛護協会と共催という形で、市の総合体育館前広場と市役所を使わせていただき、特別ゲストとして、タレントの浅田美代子さんと、朝日新聞社の動物保護の記事をよく書いていらした太田記者とのトークショーも開催しました。こちらにもたくさんの方にご参加いただき、興味を持ってもらうことができました。

第5回、第6回は、また中央公園に場所を移し、参加保護団体や、出店者さんの数も増え、同時にご来場いただく参加者さんの数も増え、5,000人規模の大きなイベントへと育ちました。

第7回の開催は、神奈川県動物フェスティバルとの同時開催ということで、寒川中央公園で、獣医師会の先生方、保健所の皆さま、寒川町役場の職員の皆さまのご協力のもと、大きなイベントとなりました。こちらは、人出も過去最高となり、8,000人余り

のご来場があったとのこと。また、動物フェスティバルの中でわんにゃんマルシェの活動を認めていただき、表彰もしていただきました。

そして、昨年の第8回、コロナ禍での開催です。イベント自体の開催が危ぶまれる中、企画も二転三転しつつ、私たち実行委員会でも何回も話し合っ、イベントをやっているのかどうなのかと迷いながらの開催でもありました。最終的に当初の予定よりはだいぶ規模を縮小して、保護団体さんの譲渡会を中心に開催させていただきました。

コロナの感染予防をしつつ、入場制限やいろいろな規制もしながらの開催でしたが、私たちの予想を大きく上回る800人近くの方にご参加いただきました。

いつもは協賛企業さんも参加していただくのですが、協賛を集めるすべもなく、昨年度はこちらの市民活動げんき基金補助事業のスタートアップ支援に助けられての開催でした。私たちの活動の目的を知ってもらうためのパンフレットも作成させていただき、多くの方に手渡すことができました。ありがとうございました。

今まで、全8回のイベント開催で、募金の総額は100万円を超え、保護犬は30匹以上、保護猫は50匹以上、新しい飼い主さんと出会うことができます。

今年度もわんにゃんマルシェの活動は続いていきます。コロナの状況がまだまだ癒えない中ではありますが、もし予定どおりにイベントを開催できるようならば、動物愛護の啓発をさらに広めるために、動物愛護に関する有識者のトークショー、ペットのしつけ教室、マナー教室で正しい動物の飼い方を学んでもらうこと、昨年度作成させていただいたパンフレットの配布、動物と飼い主さんのマッチング、保護団体による保護犬・保護猫の譲渡会、また、イベントはどうしても年に1回くらいしか開催できないので、イベントに参加できない人にもいろいろなことを知ってもらいたいと思い、新たにわんにゃんマルシェのホームページを整え、私たちの活動を知ってもらう、また、SNSとの連携で交流を図り、興味関心を持っていただけるようにしたいと思っています。

これからの目標と取り組みです。捨てられる命がゼロになること。私たちの活動にゴールがあるとすれば、それは、捨てられる動物がいなくなることです。ペットを飼う人が、その命に責任を持って、生涯飼育を全うしてくれることです。人と動物がともに幸せに暮らせる社会の実現を目的とし、今後も活動していきたいと思っています。

動物愛護の考え方は、まだまだ普通になかなか広まっていかないという部分があるので、動物愛護の考え方を一人一人にきちんと正しく持っていただく、考えてもらうということの大前提として活動していきたいと思っています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

○事務局

わんにゃんマルシェさん、ありがとうございました。

それでは、質疑応答に移ります。山田委員長、よろしくお願いたします。

○山田委員長

承知しました。では、委員から質問がありましたら、お尋ねください。

どうでしょう。委員の皆さま、いかがですか。では、中川委員、お願いします。

○中川副委員長

毎年、毎年、広がりを持って活動が根づいているというのを実感させていただきました。最後におっしゃっていた、なかなか広まっていけないという、その原因についてですけれども、救える命も救えなくなるというような、広まっていけないという、その原因といたしますか、そういうものはどのようにお考えになっていらっしゃるでしょうか。

○わんにゃんマルシェ実行委員会（川上）

根本的なことを言ってしまうと、ペットショップとかで気軽にというか、手軽に、わんちゃん、猫ちゃんを買ってこれてしまいます。何の知識もないままに犬、猫を飼い始めるという人がものすごく多いと思うのですね。飼い始めてから、このようなことではなかったとか、犬が吠えるとか、噛むとか、しつけができないとかという、いろいろな原因で愛護センターのほうに持ち込まれる動物というのもものすごく多いのですね。この前、ニュースでも言っていたのですが、コロナでステイホームが広まって、ペットを飼いたい人がものすごく増えて、ペット需要がすごい増えたのですが、それ以上に、やっぱり飼えなくなったという持ち込まれるペットが多いという話を聞くのですよ。その部分は、正しく飼う、そして生涯責任を持って飼うという意識を皆さまが持ってくださったら、捨てるという行為がどのように大変なことなのかというところに思い至っていただけるのかなと思っています。それを広めるために、微力ではありますが、イベントで人を呼んで、周知してもらおう、また、ホームページなり何なりで周知してもらおうという活動が必要なのかなと思っています。ただ、バーツと広がるというのはなかなか難しいことなので、それはこれからの私たちの課題でもあると思っています。

○中川副委員長

そうしますと、飼いたい人と、飼っている人のマッチングといたしますか、それをうまく結びつけることというのはなかなか難しいのですか。斡旋するといたしますか。

○わんにゃんマルシェ実行委員会（川上）

保護犬とか保護猫とかですか。保護団体さんたちでも譲渡会を今まではやっていらしたのですが、コロナで去年とかは全然それが開催できなかったというのもあるのですね。今年も大きいイベントも全然ないですし、譲渡会自体を開ける場所がないということで、各保護団体さんは自分たちのホームページとかでワンちゃん、猫ちゃんを紹介したりとかはしているのですが、多くの人に見てもらおうという機会がなかなかつくれない

という現状はあります。

○中川副委員長

なるほど、わかりました。ありがとうございます。

○山田委員長

続いて質問はいかがでしょうか。中野委員、お願いします。

○中野委員

川上さん、ありがとうございます。わんにゃんマルシェ、輪が広がってきて、年々大きくなって、育っているイベントだなというふうに、お話を伺って実感しました。

端から見ていると、活動されている皆さまは、保護活動をしなが、お仕事もされながら、お祭りの企画を実施もしながら、ものすごい多忙な中で、またさらにホームページも運営していこうというところで、非常にご苦労がおありなのかなと思ったりするのですけれども、そのあたり、体制というか、事務局的なことがすごく必要になってくるのではないかなと思うのですが。

○わんにゃんマルシェ実行委員会（川上）

現状、なかなか手いっぱいなところではあります。でも、イベントに関しては、年に1回なので、企画がはっきり固まってしまえば、あとはいろいろなところに手配したり。今まで何回もやってきたことなので、手順的にはもうわかっているし、準備するものも大体わかっている。ただ、去年に関してはコロナというのがあったので、その対応がものすごく大変だったということと、今年もそれがどうなるかわからないというところで、今回、イベントに関しては、人手を増やさせてもらえるような企画として提出してあります。

あと、ホームページに関しては、これも何人かで担当して、毎日、毎日更新するわけではないので、中身を精査しながら更新していけたらいいかなと思っています。

○中野委員

ぜひ裏方の協力していただける方を増やしていったらいいかなと思います。

○わんにゃんマルシェ実行委員会（川上）

そうですね。スタッフさんはもっともっと増やしていけたらいいかなと思っています。よろしくお願いします。

○中野委員

ありがとうございます。

○山田委員長

続いて質問がありましたら、お願いします。では、北川委員、お願いします。

○北川委員

ありがとうございます。本当に素晴らしい取り組みだと思います。私も生まれてからずっと犬のいる生活を送ってまいりましたので、ネガティブな負の側面というのは心痛めるところがあります。

こういった取り組みは全国でも様々行われているかなと思うのですが、1つのモデルケースというか、目指しているような例がどういうものかで、そこの間で、今、目指している中で足りていない部分というところは、何か分析というか、考えていることがあれば、教えてください。

○わんにゃんマルシェ実行委員会（川上）

目指しているものとかというのは、特に具体的なイベントだったりとかというのはないです。本当に私たちもイベントのプロではなくて、それこそ素人の集まりみたいな感じのところから始まって、自分たちの予想以上にイベントが大きくなってしまったという側面もあるのですね。そこに自分たちが追いついていくのが精いっぱいみたいな感じになっていて、ただ、代表が言うには、イベンターを立ててのイベントにはしたくないと。自分たちの思いがきちんと伝わるようなイベントにしたいとは言っています。

それは、規模が大きくなればいいのかということではなくて、最初にお話ししたとおり、動物愛護の精神だったり、動物を生涯飼うというところの私たちが目的としていることをきちんと伝えていけるようなイベントなり、団体なりにできたらいいなとは思っています。

○北川委員

ありがとうございます。

○山田委員長

ありがとうございます。

まだ時間があるようですので、どうぞ質問がありましたらお願いします。秦野委員、お願いします。

○秦野委員

プレゼンありがとうございます。私も子どものころから犬と一緒に生活してきているので、生涯飼育というか、きちんと飼っていくことの大切さを改めて感じるプレゼンでした。ありがとうございます。

これは、質問というよりも、意見というか、コメントの部分になるのですが、ぜひ今後PRするときに、茅ヶ崎市内の中で、例えば、小さなお子さんがいるご家族が多いエリアですとか、あとは、独居高齢者の方が多いエリアとか、特に浜見平はそうなのですけれども、猫の問題を抱えている地域が多分茅ヶ崎の中にもあると思いますので、ぜひそういったところに重点的にPRをしたり、紙媒体のものを置いて、それがホームページにつながるとか、知ってもらえる機会をぜひつくっていただければいいなと思いました。頑張ってください。以上です。

○わんにゃんマルシェ実行委員会（川上）

ありがとうございます。紙媒体のものを配布ということで、昨年度の市民活動げんき基金補助事業でパンフレットを作成させていただいたのですけれども、それを今年はイベントだけでなく、いろいろな店舗さんに置いてもらったりとかして、手に取ってもらえるように配布していこうかなとは考えています。よろしくお願いします。

○山田委員長

ありがとうございます。

では、時間ですので、質疑応答は以上とさせていただきます。ありがとうございました。

○事務局

わんにゃんマルシェさん、ありがとうございました。

続きまして、「みみとこころのポータルサイト」について、一般社団法人4H e a r t s様からご説明していただきます。よろしくお願いいたします。

○一般社団法人4H e a r t s（那須）

まず、自己紹介させていただきます。4H e a r t sの那須かおりと申します。生まれつき耳が聞こえなくて、右側のモニターのほうに音声認識を表示させて、皆さまのお話を理解していました。

実は、全く耳が聞こえなくて、人工内耳を左側にしておりまして、発声がきれいなので、聞こえないというふうにあまり思われなのですけれども、そういうところで誤解が多くて、結構大変な思いをしてきました。自分の声も全然聞こえていないので、声が震えていたり、小さかったり、いろいろするかもしれないのですけれども、そこはご了承いただけたらと思います。

今日は、どのような困り事があるのかとか、2年度の市民活動げんき基金補助事業を活用してどのようなことをしたのか、3年度はこのように活用したい、今後の活動の展開という感じで順番に話をしていきたいなと思います。

全てに困っているのに、困り過ぎちゃって「困っていない」と言っちゃう子どもだった

りだとか、ロールモデルが身近にいないとか、蓄積されるはずの社会通年、常識だったり、聞こえないことによって育ちにくかったりとか、あとは、何ができて、何ができないのかという自分の中の整理ができていなくて、言葉にできないとか、そういういろいろな困り事が、聞こえない人にはありまして、そこをこういうふうな感じでいろいろ改善してみたら、よりよくなってきたらいいなということを考えたきっかけもあって、4 H e a r t s の活動をやろうと思いました。

このように、聴覚障がい者を取り巻くいろいろな課題があるのですけれども、例えば、人工内耳は、最近、手術件数が増えまして、例えば、ろう学校の小学部に行くと、半数以上が人工内耳をやっているという状況にあったので、教育が大幅についていけないというのがあります。

インテグレートというのは、ろう学校から一般の小学校に変わったりする子なのですけれども、このインテグレートが増えると、今度は逆にその子たちが、自分の障がいを、このように自分は聞こえないから、こういうふうな支援してくださいみたいなことを言えないとか、説明できないことが増えているのですね。聞こえる家族と聞こえない家族、聞こえない自分自身、それは、わかりやすく言うと、外国人が同居しているような感じになってしまう。文化が違うので。なので、家庭内で孤立してしまう点が正直あります。

手話言語を母語にする。要するに、手話で考えて、手話で話すという人たちは、文化的なずれがありますので、対人トラブルが起きやすいです。それから、社会生活で脱逸したり、そういう人もいますので、職場でうまくいかなかったり、同僚と上司と交渉できなかったり、社会的孤立も起きやすいです。なので、専門的心理支援という要請が今年もあるということで、私自身も今年の1月、産業カウンセラーに合格しまして、それで活動していきたいなと思っています。

2年度の市民活動げんき基金補助事業を活用して、株式会社ボンドさんとか、NPO法人セカンドワークさんとか、サイト作成、デザイン、その辺を手伝っていただきまして、去年の9月に正式公開、ポータルサイトをやりました。このような感じで、ページビューとか、訪問者数とかあるのですけれども、実際、まだまだ少なく、フライヤーの制作もしました。協力していただいたのは、ライターさんのイケダさん、あとは、ボンドのイチカワさん、その方に手伝ってもらいながら、こういうフライヤーもつくりました。

今度、3年度の市民活動げんき基金補助事業を生かして、もう少し記事を充実させていきたいな、信頼性とか質を高めていきたいなと思っています。

神戸の長田ふくろうの杜に取材に行きたいなと思っけていまして、これは市民を巻き込んだ先進事例なので、総合的な聴覚障がい者専門のデイサービス、子どもの支援所みたいな、そういうところがいろいろついた建物になっているのですけれども、そういうのを取材したいなと思っています。

手話というのは、視覚言語なので、動画のほうが伝わる部分もどうしてもありますから、そっちのほうも力を入れていきたいなと思っています。

4 H e a r t s の市内認知を上げていくことによって、もう少し活動を広げていきたいなと思っています。

「みみここカフェ」と言いまして、これはコワーキングスペースのチガラボさんでこういうふうな感じで開催しています。対話の場をつくっています。2月と、今度行われる4月は、オンラインで開催を予定しています。

予算書のほうには書いていなかったの、ここに記載していなかったのですけれども、聞こえる人、聞こえない人ごちゃ混ぜのフットサルとかもやっていたりします。

4 H e a r t s の活動と今後のことについてですけれども、そもそも何でこの活動をしようと思ったのかというと、先ほど申し上げました、いろいろな困り事があることもそうです。聞こえない人という一括りにされてしまうのですけれども、そうではなくて、難聴の聞こえにくい人とか、あとは、口話教育で育った、手話で育った、一般の学校で育った、ろう学校で育った、それぞれ、皆一人一人違うのですね。だから、困り事だったり、コミュニケーションの方法も一人一人違うから、そういうことが今の世間に認知されていない。

それから、欠格条項というのは、私が大学生のときもそうだったのですけれども、お医者さんになるとか、看護師さんになるとか、そういうのは全部禁止されていたのですね。なので、社会からいろいろと拒絶されているような部分が正直あって、電話をかけたくても電話をかけられない。本人確認が必要なことも、手話通訳の方が間に入ったりしても、それは許されなかったりするの、そういうところで社会参加はなかなかできないというのがあります。心理支援、就労支援、そういったことがこれから必要になってくる。

聴覚障がい当事者がどんどん発信していかないと、何に困っているのかを一般の人もよくわかっていないと思うので、それをどんどんと発信していきたいなと思いました。それは、みみとこころのポータルサイトがそれを担っていけたらいいなと思っています。

今後、私たちは何がしたいのかというと、茅ヶ崎市を手話特区にしたいのです。それは何でかかというと、手話言語条例というのが神奈川県に制定されているのですけれども、制定したはいいが、何をしたらいいのかわからないというような状況で、何も活動していないとか、手話を啓発したらいいか、知ってもらおうということだったり、動きとしてあまりないので、そこをもう少しやっていきたい。茅ヶ崎市の飲食店に接客手話を教えたりとか、そういうことで、もっと聞こえない人が入りやすいような社会になってきたらいいなと思います。「みみとこころのポータルサイト」と、就労支援もやっていきたいなと思います。

S D G s 実証実験カフェバーですが、ここは、就労支援とコワーキングとカフェ、そこで聞こえない人だって接客業をやりたい人がいるので、聞こえないから接客できないでしょうと決めつけられて採用されないというのが正直あるから、そこをもう少し何とかしていきたいなと思います。

ソフトバンクヒューマンキャピタルさんからもお声がけをいただきまして、聴覚障がい

者専門転職サイトのお話もきています。サイトは3月末に完成予定ですが、業態も含めて稼働ができるか判断したいなと思っています。

自分も産業カウンセラーに合格しましたので、就労支援をやっていきたいなど。

5月4日に『咲む』という映画が公開されるので、飲食店の案内だったり、のぼりだったり、まち全体で手話を盛り上げる日にしたいなと思っています。指さしメニューについては、神奈川大学とかの共同研究にこれからしていきたいなと考えています。

以上になります。

○事務局

那須さん、ありがとうございました。

それでは、質疑応答に移ります。山田委員長、よろしく願いいたします。

○山田委員長

承知しました。では、質問のある委員、ぜひお尋ねください。高橋委員、お願いします。

○高橋委員

プレゼンありがとうございました。後半に出てきたSDGsの実証実験でカフェバーが挙がっていたと思いますけれども、何でカフェバーなのかということ。これにこだわったものではないのか、何かこだわりがあるのか、そこら辺を教えてください。

○一般社団法人4Hearts（那須）

聞こえない人は、飲食店の、例えば、バーのマスターさんとコミュニケーションがとれないのですよね。なので、職場でしんどい思いをして帰ってきて、少し飲みたいなと思っても、入りづらかったりというのが正直あって、家に帰っても愚痴をこぼせないということもあるので、飲食店、リラックスできる居場所があったらいいなと思ったのがきっかけです。先ほども申し上げましたけれども、聞こえない人は接客業ができないと決めつけられて、なかなか採用されなかったりするのですが、接客したい、コミュニケーションをとりたいと思っている聴覚障がい者もいるので、そういった人たちに就労訓練というか、そういうところをさせて、そこから社会に送り出した後、私は産業カウンセラーとしてバックアップしていく。そういう一貫した支援の仕組みをそこでつくれるのではないかと考えております。

○一般社団法人4Hearts（津金）

補足ですいません。これに関しては、将来的な展望として載せているだけで、今回の事業の中ではありません。

○高橋委員

わかりました。

○山田委員長

続いて質問がありましたら、どうぞお願いします。では、中川委員、お願いします。

○中川副委員長

みみここカフェのホームページを見せていただきまして、カフェの様子を見ていましたら、聴覚障がいの方だけではなくて、例えば、目の障がいをお持ちの方も出ていらしていますね。いい交流をなさっているなというふうに思っているのですけれども、1つ、これはお聞きしていいのかどうか、私もわからないのですけれども、那須さん自体がこのように当事者として本当にリアルな言葉を持ち得ていて、私はプレゼンの資料を見ただけで、当事者が発言する言葉を持つということはどういうことかと思うほどリアルで、しかも説得力があるのですけれども、ご自身は、当事者として支援に回るきっかけとなったこととか、そういうようなことをもし話していただけたら、他の障がいを持っている方たちにも元気づけられるのかなと思ひまして、もし答えていただけるならお聞きしたいなという気持ちがあるのと同時に、要するに、同じ障がいを持った方だけではなくて、何らかの障がいを持った人が一歩前に入るきっかけというのが何だったのかというところをお聞きしたいなと思ひました。

○一般社団法人4H e a r t s（那須）

ありがとうございます。

自分は、小学校、中学校は一般の学校に行っただけです。そうすると、先ほどからずっと言っていますけれども、自分が聞こえないということがわかっていなかったのですね。それは何でかといったら、こちらが話すことはきれいに話せるので、他の子とそのように変わらないような感じになってしまうのです。でも、聞こえていない。みんなが聞こえているというところが100だとしたら、自分はどこまで聞こえているのかというのがわかっていないので、わからなさを自分がわかっていないということで、わかっていなかったのですね。

高校はろう学校に行っただけですけれども、今度は逆に、みんな手話をされていて、自分だけが手話がわからなくて、聞こえる人と聞こえない人のどちらの世界にも入っていなかったのです。その狭間をずっと歩いてきたというのが正直ありました。

そこは、自分にとってすごい苦しかったのですけれども、あるとき、自分は神戸に住んでいたもので、阪神大震災も経験しているし、いろいろな生とか死とかを見てきて、改めていろいろ考えたときに、いろいろな出会いとかもありまして、その狭間というのを逆に武器にしまえばいいのだというふうに考えを変えたのがきっかけになります。

○中川副委員長

ありがとうございます。出会いがあったということですね。

○一般社団法人4H e a r t s（那須）

そうですね。

○中川副委員長

わかりました。ありがとうございます。

広がりのある活動だと思えますので、頑張ってもらいたいですけれども、予算書を見ますと、あまりにもたくさんの方をこなされて、大丈夫なのだろうか。私は雑誌編集をしていたことがあるのですが、このようにいろいろな人のヒアリングをして、発表するといいますか、発信するというのは、かなり大変ではないかなと思ひまして、運営のほうは大丈夫なのかなというのを少し心配しています。

○一般社団法人4H e a r t s（那須）

いろいろな人に助けていただきながらやっていきたいなと思っています。

○中川副委員長

頑張ってください。

○一般社団法人4H e a r t s（那須）

ありがとうございます。

○山田委員長

続いて質問いかがでしょうか。では、中野委員、お願いします。

○中野委員

那須さん、ありがとうございます。いろいろなことをなさってきて素晴らしいなと思って、ただただ感動しながらお話を伺っていました。

那須さんがこうしていきいたいというお話はすごくあったのですが、逆に言うと、例えば、モデルとして神戸の長田ふくろうの杜ですか、施設で、多くの市民の方を巻き込んで運営しているところの手法をすごく目標にされているというお話があったので、いわゆる私のような一般市民に対して、どういったことかかわってほしいというふうに4H e a r t sとして考えていらっしゃるのか、私にできることはあるのかなというところを、那須さんの思いで結構ですので、教えていただけたらなと思います。

○一般社団法人4H e a r t s（那須）

ありがとうございます。

ひとまず現実的なところで考えているのは、飲食店の方々に「ありがとう」でも、簡単な手話ができると、社会に受け入れてもらえているような感じが聞こえない人もするではないですか。そういうお店をたくさん増やしていったら、茅ヶ崎という小さなまちを手話特区にしてしまうというのが、多分、全国のモデルケースになると思うのですよ。それをやっていくことがまず初めにできることかなと思っていて、その先は、多分、自分たちの活動の広がり次第では、いろいろとできるのではないかと考えています。

○中野委員

ありがとうございます。手話を覚えたいと思います。

○一般社団法人4H e a r t s（那須）

ありがとうございます。

あと、これはエピソードになるのですが、この間、郵便局で、マスクと感染防止のシールドで聞き取りにくいおばあちゃんがいらして、局員さんの話がわからないから、結局、最終的に筆談になっていて、そのおばあちゃんの後ろが長蛇の列になっていてこのを見て、それを見ると本当にいたたまれないというか、まさに自分が日常的に感じていることをそのおばあちゃんがコロナの中で感じているわけではないですか。自分はそういう思いをさせたくないから、そういうところを改善していきたいなと思います。

○山田委員長

ありがとうございます。

あとお一人いかがでしょうか。質問がありましたらお願いします。では、石田委員、お願いします。

○石田委員

質問というか、コメントです。今のプレゼン、本当に感動しました。ありがとうございました。行政の方によくよく聞いてもらいたいのですけれども、茅ヶ崎市手話特区構想、これをぜひ佐藤光市長にも届くように、委員からの声があったというのをぜひ行政のトップの方に伝えるようにしていただきたい、このように思います。本当にプレゼン、どうもありがとうございました。

以上です。

○一般社団法人4H e a r t s（那須）

ありがとうございます。

○山田委員長

ありがとうございます。

では、質疑応答の時間は以上だそうですので、これで終了したいと思います。ありがとうございます。

○一般社団法人4H e a r t s（那須）

ありがとうございました。

○事務局

それでは続きまして、「夏休み子ども向けSUP体験会」について、特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオンさんからご説明していただきます。よろしくお願いいたします。

○特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン（太田）

よろしくお願いいたします。

NPO法人SUPUスタンドアップパドルユニオンの太田と申します。このたびは、茅ヶ崎を元気にするという市民活動げんき基金補助事業に応募させていただき、ありがとうございます。我々のほうは、夏休みを利用した子ども向けのSUPの体験会ということで、小・中学生を対象にした体験会を実施したいと考えています。

今回、このような場を設けていただき、大変ありがたいと思っております。プレゼンテーションの内容としましては、SUPというものと茅ヶ崎、夏休みの子どもに向けたSUP体験の内容、実行費用の説明と観光振興についてということでプレゼンテーションさせていただきます。

まず、SUPと茅ヶ崎ということで、SUPというものですが、スタンドアップ、立ってパドルを使ってボードに乗る。サーフボードの大きなものに乗った状態で、パドルを使ってこいで前に進むスポーツになります。

SUPは、浮力が大きくて、子どもから大人まで、初心者の方でも、少しのレッスンですぐにこいで乗ることができるものになります。浮力が大きく、立って漕ぐことから、SUPを使ったクルージングであるとか、波に乗ったり、釣りが楽しめたり、もちろん川や湖でもできます。

我々は、SUPの人口増加に伴い、SUPを行うための安全装備のアナウンスや、リーシュコードの必須化であるとか、ライフジャケットの着用、携帯電話の携行、出艇時の声かけなど、安全対策及びもしものときの連絡方法などをホームページなどで掲示しております。

また、海上保安庁と連携して、海況の状況のアナウンスであるとか、事故の状況の掲示等を行って、普段あまり海の情報を確認できない方にもお知らせを告知していくことで、海の状況を意識してもらえるように、安全対策につなげております。

SUPと茅ヶ崎ということですが、皆さまのご存じのとおり、サーファーが多い茅ヶ崎であります。波のないときにでもSUPでクルージングや釣りを楽しむ方が非常に増えてまいりました。海に行かれたことがある方は、波のないときに一寸法師のような形でSUPを楽しんでいる方を御覧になった方がいるかと思っております。

また、コロナ禍の影響もありまして、一時休止しておるのですが、国内におけるSUPの競技大会、SUPのレースを初めて開催したのも茅ヶ崎で、我々の団体が世界大会を開催いたしました。

コロナ禍の中で、昨年の4月から学校が一時休校になる中、市内の小・中学生たちは自宅待機を余儀なくされ、運動もなかなかできない状況でありました。私の子どもたちも同じように家の中で待機していたということです。

それから、緊急事態宣言の解除後も、スポーツ大会、イベントの中止が相次ぎ、一番盛んに運動できる時期に力を持て余している子どもたちが多いと聞いています。我々は、密になる機会が少ない海をフィールドに、サーフィンよりも簡単にできるSUPを用いて、気軽に、また市内の子どもたちからも開催要望のあったSUPといったものを用いて、今回の事業活動を利用させていただいて、夏休みに小・中学生が楽しくスポーツができるようにSUP大会を企画しました。

子どもたちがSUPを使って海を学ぶことで、茅ヶ崎をもっと楽しめると思っています。サザンビーチを初め、サーファーの多さからも、海のイメージが多い茅ヶ崎ではあります。SUPを生涯スポーツとして楽しんでいただいて、茅ヶ崎の1つの風景としてSUPを定着させていきたいと考えています。

それから、国内で急速に発展しているSUPの盛んな地域、安全にSUPを楽しめる地域として、SUPをやるなら茅ヶ崎へ行こうという形が確立されていって、他地域からも茅ヶ崎に来る人が増えていくのではなかろうかと思っております。

今回の体験の内容ですけれども、夏休み、7月から8月の間に3回、1回完結で、1回来ていただいた後、次年度の夏休みの期間が確定した後で日程は決定しますが、複数回やっていただくことも可能と考えています。おおむね小学校3年生から中学校3年生までの子どもたちに告知して、各回20名までにしたいと思っております。

内容ですが、砂浜で30分程度の海のルールやマナーをレクチャーして、もちろん海は自然でありますので、天候、風、波、潮、海で楽しむ人々、いわゆるSUPで楽しむ人以外の方たちの説明をしたり、海上へ出てからも、SUPの技術も含め、海水、波の周期などを体感していただきたいと思っております。

実際、指導に関しては、国内で唯一の日本SUP指導協会といった、S I Jと言いますが、インストラクターが行ってまいります。

実行費用についてということですが、通常、参加費として4,000円程度いただいているのですが、今回の事業を活用させていただいて、1回当たり500円で参加していただいて、国内のインストラクターの方をお呼びして、SUPを使って楽しんでいただきたいと思っています。

市内の活動として、ホームページ、フェイスブック及びチラシ・ポスターをつくって、市内のあらゆる場所に広報していきたいと思っています。

それから、海のスポーツになりますので、保険を毎回かけて、安全に楽しんでいただけるように考えています。

観光振興ですけれども、冒頭も申し上げましたが、茅ヶ崎市に関して、海ということで、SUPキッズ体験会が近隣、他県にも広がって、茅ヶ崎にSUPをしに来てくださる方が増えるのではなからうかと予想しています。SUP体験会を開くことで、近隣の飲食店、または地域の住民の方にも周知いただいて、SUP体験会に合わせた企画などもお願いしようと思っています。

コロナ禍対策ということで、消毒等、ソーシャルディスタンスを保てる形で体験会を開催して、SUPを通じて経済活動が促進され、茅ヶ崎を元気にできる企画でなからうかなと思っています。

駆け足ですみません。最後にですけれども、子どもたちがコロナ禍で大変なストレスを抱えているというのは、皆さまもご承知のことかと思えます。茅ヶ崎から海に出て、SUPを知っていただくことで、茅ヶ崎というものが海のスポーツ、SUPを楽しめる場所ということで周知していただいて、我々も元気に茅ヶ崎市を盛り上げていけるように日々努力していきたいと思えます。

我々のプレゼンテーションは以上になります。

○事務局

ありがとうございました。

それでは、質疑応答に移ります。山田委員長、よろしく願いいたします。

○山田委員長

承知しました。それでは、質問がありましたら、お尋ねください。いかがでしょうか。では、中川委員、お願いします。

○中川副委員長

プレゼンありがとうございました。

私、SUPというのは知らなくて、初めて聞いた言葉だったのですけれども、海に行きますと、サーフィンをやっている人はたくさんいらっしゃいますよね。サーフィンは、波がないとなかなかできないと思うのですが、SUPというのは、波があると不安定になる

ような感じがするのですけれども、サーフィンとSUPの関係といたしますか、相性といたしますか、それはどのようなものなのかというのを一つお聞きしたいのと、もう一つ、経費のことで少しお考えいただけないかなと思うことがありまして、インストラクターがお1人2万円と講師料を書いてあるのですけれども、市民活動げんき基金補助事業のボランティアな活動をする中で、専門家でも1万円くらいの感じがあるのですけれども、そのあたりはどのようにお考えなのかなというのと、2つお聞きしたいと思います。

○特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン（太田）

まず1つ目、SUPというものです。もともとハワイ発祥の、SUP自体でももちろん波乗りができます。ただ、サーフンは、いわゆる波に乗ることが前提なので、波がないとできないのですけれども、SUPは、お話ししたとおり、波がないところでもできるし、波があっても乗れるものなのです。ただ、SUPというものは、ボード自体が長くて、今、レースで使うようなボードは4メートルを超えるものもあります。ですので、みんながみんな、ボード自体を持てるかという、そうでもなかったりしますので、我々の体験会では、ボードはレンタルで準備して、波があっても、非常に大きい波だと、サーフィンほど波乗りは簡単ではないのですが、少しの波であれば、浮力が多いものですから、簡単に波に乗ったり、サーフィンよりも簡単に楽しむことができるというのがSUPの特徴であろうかと思っています。

2つ目の費用の件ですけれども、今回、申請させていただくに当たって、インストラクターの方の金額に対しても検討させていただきました。ただ、その部分で1回当たり2万円というところに関しては、インストラクターの方もそれぞれのご自分たちのお仕事の範疇で依頼することもありましたので、一旦2万円という形で計上させていただいています。

○中川副委員長

わかりました。ありがとうございます。

○山田委員長

続いて質問がありましたら、どうぞお尋ねください。では、中野委員、お願いします。

○中野委員

プレゼンありがとうございます。

すごく茅ヶ崎らしい事業だなという印象なのですけれども、今回、対象が子どもですね。私たちサポートセンターで先日子ども向けのイベントを行ったときに、子どもにアプローチするのは難しいなというところを感じていまして、広報の仕方で、公民館、チラシとか広報紙とかありますけれども、子どもは多分あまり見ない。それから、フェイスブッ

クも子どもたちはあまりなじみのないツールであったりすると、どういうふうにアプローチするというか。サーフィンにはイメージが多分あると思うのですが、SUPという、どれくらい今の子どもたちにイメージが浸透されているのかなというのが私もわからないところがあるので、例えば、動画みたいな配信とかでアピールするとか、そういったことも考えられるのかなと思ったりするのですが、いかがでしょうか。

○特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン（太田）

おっしゃるとおり、子どもたち自身への広報というのは非常に難しいかなと思ってます。今、サーフインは、SUPよりも茅ヶ崎に根づいていますので、近隣のサーフショップのお父さん、お母さんに向けて、まず発信させていただいて、サーフィンをやっている親御さんでも、お子さんは、1回やったけれども、難しいからやめちゃったとか、そういう方も結構いらっしゃることも知っています。

なので、そういった方に向けてということと、あとは、飲食店のほうにチラシを貼っていただいたりとか、我々の団体は、先ほど申し上げた、2009年から団体を立ち上げて、世界大会もやる中で、茅ヶ崎の近隣の住民の方、飲食店の方、小売店の方ともお付き合いさせていただいている中で、そこに対してチラシを配ったり、ポスターを貼っていただいたりという活動をあわせて進めていきたいと思っています。できれば、学校の掲示板であったり、市の活動ということになりますので、茅ヶ崎市の方に可能な限り子どもたちに発信できるような場を教えていただいて、我々もそこへ向けて発信していければなと考えています。

○中野委員

ありがとうございます。

○山田委員長

ありがとうございます。

続いてご質問いかがでしょうか。では、柴田委員、お願いします。

○柴田委員

プレゼンありがとうございました。

実施のところでは質問ですけれども、各回20名募集ということで、実際、海に出られるときは、20名全員で出ていくというか、SUPをしに行くのかなという疑問があって、その人数で海に一気に出るというのは、個人的に、よくわからないのですけれども、危ないのではないかなという印象があって、先ほど、海上保安庁との連携もあるとは言っていたのですけれども、その辺のことを詳しく教えていただければなと思います。

○特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン（太田）

具体的に申し上げますと、ご質問のあったインストラクターが6名という中で、20名を一気に、1人、2人のインストラクターではもちろん賄えませんし、一気に出るとぶつかったり、事故も想定されます。ですので、海に集まって説明する段階から、インストラクター単位の、できる限り3～4人という形でグループというか、班というか、そういったものを形成しながら、一気に出るわけではなくて、順番にインストラクターが把握できる範疇の中で海に出ていきたいと思っています。

それまで、インストラクターは、それなりの経験と実績があるメンバーを、もちろん初めての子どもたちですので、どういうふうにボードを持ったらいいかとか、海の波の感じとかもわからないはずですので、そういったものを陸上でレクチャーしながら、お子さんによっては、海自体が怖いお子さんもいらっしゃると思いますので、そういった子どもたちにも合わせながら、それぞれのグループ体で体験していただきたいなと思っています。

○柴田委員

わかりました。ありがとうございます。

○山田委員長

ありがとうございます。

質疑応答はこれで終了ということにさせていただきたいと思います。

○特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン（太田）

ありがとうございました。

○事務局

スタンドアップパドルユニオン様、ありがとうございました。

続きまして、「～市民活動団体にIT伴走する～『Webサポーター育成事業』」について、NPO法人セカンドワーク協会様から説明していただきます。

○NPO法人セカンドワーク協会（四條）

では、よろしくお願ひします。NPO法人セカンドワーク協会の四條と申します。本日はこのような機会をいただきましてありがとうございます。

テーマは、「～市民活動団体にIT伴走する～『Webサポーター育成事業』」ということでございます。

まず、我々の団体のミッションをご説明したいと思います。

まず、解決を目指す社会課題という観点では3つありまして、1つは、シニアですね。私もそうですが、65歳を超えても働くことを多くの方が望んでいるが、残念ながら本人

が希望する条件を満たす仕事は少ないし、あったとしても、やりがい、働きがいを感じられる仕事かなという、必ずしもそうではない。

一方、現役クリエイター、特に、茅ヶ崎市で働いている、首都圏の会社に属されている方は多いわけですが、そういう方は、働き方改革の影響で業務量が減少して、居住地域で副業を行いたいとか、あと、自分のオリジナリティを生かしたいとかもある。

一方、茅ヶ崎の活性化を担っております市民活動団体様は、情報発信は希望しているのだけれども、予算的、人力的な問題でWebは持っていないし、さらに、Webを持って、なかなか更新できないという課題があります。この3つの課題を一遍に解決してしまおうということでもあります。

私自身は、60で定年しましてホームページ屋になりまして、Web制作が非常に魅力的だなということを感じております。非常にWebを必要としているお客様がおられますし、その辺をうまくすくって、お客様の目的にかないますと、非常に感謝される。

あと、純粋にボランティアではなくて、多額ではなくても、お金はいただける、稼げるということもあります。

それから、仕事の質も、単純作業ではなくて、非常に専門性が必要で、学びが必要なので、みずから成長を感じられるとか、そのようなメリットがあるかと思えます。

そういうことで、Webをつくるということを中心にしまして、我々のシニア・ミドルが現役のWebクリエイターさんの支援を受けながらコラボレーションして、地域の活性化を支える市民団体様に対して良質なWebサイトを提供していくと。ただ、少額ですが、対価をいただいて、それを資金やWeb制作に回す。

あと、大事なポイントは、その後も、作っただけではなくて、伴走していくということが大事だということで、NPOをつくって活動してまいりました。一昨年でした。

先ほどご説明がありましたが、一般社団法人の4Hearts様のWebサイトをつくらせていただいて、現在も毎月1回オンラインの打ち合わせをさせていただきながら、皆さまのためにWebの情報発信を続けております。

それから、昨年のもう一つの例は、マザーアース茅ヶ崎様。これは、茅ヶ崎の防災情報を発信するサイトで、ユーチューブ等で茅ヶ崎のメディアのチェック結果などをつくっているのですが、この辺も含めて情報発信をしています。

これは、藤沢市で収益団体なのですが、公益性が高いという観点でうちのNPOでやった例ですけれども、定員5名の家庭的保育室、ちゅうりっぷ保育室様のWebページをやらせていただいております。

さらに、昨年、我々NPOとして非常に大きな経験でしたのが、市民活動げんき基金補助事業でございます。昨年9月の16日、23日で事前説明会、27日にオリエンテーション、その後、セミナーを隔週6回開催して、成果発表会を行いました。チラシは1,000部。チガラボで、ちょうどコロナの谷間だったので、リアルなオフラインのセミナーを開催いたしまして、5組8名のご参加をいただき、結果的に4つのWebの公開を完了

し、1つのWebの将来構想案を策定、ご支援をさせていただきました。さらに、8名の方のうちの7名がうちのNPOに参加していただいたという実績も出ております。

具体的には、松林サポートセンター様のサイトとか、不登校の親子を支援する親子の居場所応援ラボとか、本日の自治会の防災情報だとか、小和田の熊野神社のサイトとか、こういうサイトが実際に支援することができました。

アンケートの結果もわりとよくて、心から満足と言っていたり、本当によかったと言っていたりして、そういう意味でテーマとかコンテンツはよかったなど。

一方、時間配分とか進行については、やや満足というのがあって、満足ではなく、やや満足なので、若干課題があったのかなど。

特に、あと課題だったのは、「ITシニア」という言い方で訴求しましたので、ミドル世代、特に女性の方が、私、参加していいのかしらと、チラシを見てよくわからなかったという意見がありまして、そこは大きな課題だったかなと思っています。

今回の事業については、ITリテラシーのあるシニア・ミドル世代、特に女性に対してアピールをしていきたいと。セミナーの回数は6回ですけれども、セミナーのレベルを上げたいということ。

それと、ITリーダーというのは少し重たいなということで、Webサポーターという定義にしました。具体的な役割はどういうことかといいますと、所属する組織のWebを制作、運営をして、SNS、ITサービスも併用活用して、結果的に組織活動の活性化とか、組織メンバーの増加に寄与する。そういう役割です。

それが自分の所属する組織のためということもありますし、さらに、他の組織のWeb、あるいはSNS、ITサービスの活用に関するアドバイスができて、実践的な支援ができると、そのような役割を担っていただくWebサポーターを育成していくと。これはずっと続けたいと思っておりますし、それもありまして、昨年度に続いて、今回、応募させていただきました。

課題の対応策としまして、スムーズな進行とかがもう少しということもありましたので、カリキュラムの教材、この辺のレベルアップはやっていきたいなということで、特に、我々オンラインで事業をやっているのですが、教材はまだ紙レベルなので、そこはチューブとか、オンライン化したいなと思っておりますし、あと、どうしてこのように5回できてしまうのかというと、サンプルWebサイトというのを我々はおつくりしております、サンプルWebサイトをベースに皆さまの情報を載せていくという、Webをつくる基本中の基本のサンプルサイトの完成度を上げて、さらにつくりやすくしたいなということです。

最後に、チラシをいっぱいデザインして、シニア・ミドルの特に女性の方に訴求をしていきたいなと思っております。

以上でございます。本日はありがとうございました。

○事務局

ありがとうございました。

それでは、質疑応答に移ります。山田委員長、よろしく願いいたします。

○山田委員長

それでは、質問がありましたら、委員からの質問をよろしく願いいたします。いかがでしょうか。委員の皆さま、どうでしょうか。では、柴田委員、お願いします。

○柴田委員

プレゼンありがとうございました。

先ほどのパワーポイントにあったのですけれども、女性の方へのアプローチをしたいということだったので、具体的にターゲットを決めているので、そこにアプローチする具体的な工夫とか方法というのは考えていますか。

○NPO法人セカンドワーク協会（四條）

まず、広報のメディアについては、チラシが一番必要だと思っていて、そのチラシは1,000部今年もつくりたいなと思っっているのですが、この前のチラシはシニア向けだったのですね。ですので、例えば、サポセンさんとか、自治会館とか、配布先、配架する先で、女性の方が手に取って見ていただけるようなデザインにしたいなと思っております。

あと、オンラインとかでのメッセージ発信というのもやっていきますし、実は、一番効くのはアナログ的な人脈のつながりで、なんかよさそうだよと言っていて、お声をかけていただくという流れが一番よさそうです。その辺は工夫していこうかなと思っています。

○柴田委員

わかりました。ありがとうございます。

○山田委員長

ありがとうございます。

続きまして質問がありましたらどうぞ。では、中川委員、お願いします。

○中川副委員長

Webの支援の対象についてお伺いしたいのですけれども、私の住んでいる周りにも小規模の小売店、例えば、花屋さんですとか、そういうようなところで、なかなかそこまで手が回らないし、そのような売上もないというところの方たちがいらっちゃって、そうい

う方たちへのサポートみたいなことも考えていらっしゃいますか。

○NPO法人セカンドワーク協会（四條）

まず、NPO法人としましては、その辺、会員の中で非常に議論になっておりまして、先ほど、ちゅうりっぷ保育室様、この方は収益事業でやられています。収益事業ですので、NPOで受けるべきかどうかという議論はあったのですが、社会公益性の高い事業は受けようという結論になりまして、結果的にお仕事をいただいたということで契約させていただいてつくらせていただいたという経緯があります。

NPO法人として、市民活動団体だけではなくて、公益性の高い収益事業については、Webのご支援をしていこうというのはまず決まっています。ただ、一方、もう少し一段進めると、地域活性化のために収益事業の小規模事業者様のWebサイト支援というのもあり得るなどは思っておりまして、ですので、それは線引きがある程度必要かなと思っ

ているんですね。そこをこれから検討していこうと思っています。というのが1つ。
2つ目は、一方、市民活動げんき基金補助事業でやらせていただくのは、市民活動団体様のWebということですか。

○中川副委員長

わかりました。もう少し広げて、困っている小規模事業者さんたちへの支援なども、ある意味では必要かなという感じがしましたものですかからお聞きしました。ありがとうございます。

○山田委員長

続いてご質問ありますでしょうか。中野委員、お願いします。

○中野委員

私は質問ではなくて、コメント的なことですが、四條さん、ありがとうございます。セカンドワークさん、最初のスタート支援を実施された後に、ご自分たちの実施された事業を振り返って、非常に細かく分析して、また改善につなげてと、さらに飛躍されて事業をされるところがすごいなと思っています。

今、セカンドワークさんたちのなさっていることが求められていることだなど、特に市民活動団体を支援する立場として強く思っています。今日参加されている団体の多くの皆さまがセカンドワークさんの支援を必要とされている方ばかりなので、ぜひ今後とも引き続き全面的にバックアップしていただくと、市民活動全体が盛り上がっていくのではないかなと非常に期待しています。よろしく願いいたします。

○NPO法人セカンドワーク協会（四條）

ありがとうございます。

○山田委員長

それでは、私からも1つ質問をさせていただきたいと思います。

報告を聞かせていただきますと、ITの情報の団体内蓄積に加えて、このような活動を通じて、人づくり情報を団体の中でますます力を蓄えていく。それが公益的な活動にきちんとつながっている。そういう評価とともに、次の展望をご報告くださったという印象があります。この部分についてですけれども、現状の貴団体の中での課題ですとか、こうした人づくり情報についての団体の中での人、もの、情報などの整理の仕方について、今後の継続や発展という展望も含めて、意気込みですとか、そのあたりの取り組みの方向性についてご紹介いただけますでしょうか。

○NPO法人セカンドワーク協会（四條）

少し反省も含めてお話ししますと、我々はおととしの8月に設立しまして、ベースのチガラボで、リアルのセミナーを何回もやって、皆さまにいろいろ我々の考え方もご説明して、参加人数が、会員数が増えまして、今、実際の会員数は44名まで増えています。

ただ、実際にWebをつくれるのだなと入られても、我々自身の問題もあり、それから、Webを実際につくっていくというのは、かなり難易度の高いものですし、ある程度の時間を集中的にかけていただかないとつukれないということもありまして、入会していただけたけれども、続かないよと退会される方もいて、後からも入られているのですけれども、今、実働で、30名強の状況です。ですので、最初の期待に対して応えられていない部分があるなという面はまずある中でどうしていかうかというのを今考えています。

今、わりとはやりなのですが、結局、Webをつくっていくというのは、汎用的な情報の蓄積があるのです。ですから、そういうものはWebにできれば載せてしまう。まず、資料をWebに載せるのは当たり前ですけれども、動画化をして、こういう操作をすればここまでできるよ、みたいなことの財産をどんどんためていきたいなと思います。そういう財産を積み上げていくことで我々の会員の中のレベルが上がっていく材料になるなと思っています。

それと、あと、Webのマーケティング勉強会を月1回、無料でやっています。Webの制作の勉強会を月1回やっています、公開セミナーをやっています、なので、月3回、勉強会、セミナー的なことをやっています、内部のレベルを上げようというふうにしております。できるだけそういうことはITを活用して、我々がそういう蓄積をITの世界でできますと、それもまた市民活動の方々にご提供できるのではないかなと思っています。

そのようなところです。

○山田委員長

ありがとうございます。大変よくわかりました。

では、時間になりましたので、質疑応答は以上とさせていただきます。ありがとうございます。

○事務局

セカンドワーク協会さん、ありがとうございました。

以上で予定しておりました6事業の発表が終了いたしました。皆さまありがとうございました。

それでは、これより総括質疑に移ります。

総括質疑とは、市民活動のさらなる発展や市民活動げんき基金補助制度の向上などを目的に、委員の皆さま及び団体、傍聴の方々から、日ごろの活動の中で感じられていることについて忌憚のないご意見を述べていただくとともに、会場内で意見交換をしていただくものとなっております。

総括質疑の進行につきましては、山田委員長と交代させていただきます。山田委員長、よろしくお願いいたします。

終了時間は12時20分を目安に質疑ができればと思いますので、よろしくお願いいたします。

○山田委員長

では、予定よりも5分遅れているということですので、まず、総括質疑は時間どおりの内容として進めていきたいと思えます。

皆さまのご協力を得ながら、全体の今日の意義なども確認をしていくという時間ですので、今までできなかった質問ですとか、団体間の意見交換、そして、この市民活動げんき基金補助事業を今後どのように考えていくのか、あるいは、現在、どのように考えているのかということについても話を進めてまいりたいと思えます。

まず、今までお話を聞いていただく中で、ぜひこういうことを投げかけてみたかったなとか、質問として団体同士の質問を許されていなかったのか、このようなことを聞いてみたいなところがありましたら、委員、団体の皆さまを問わず、お尋ねいただきたいと思えます。いかがでしょうか。

太田さん、よろしくお願いいたします。

○特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン（太田）

我々の活動プラス那須さんのほうのお話で、少し絡めて意見というか、確認というか、質問というかです。我々の先ほどご紹介させていただいたSUPの大会に関して、耳の聞

こえない方も実は多数参加していただいています。スタンドアップパドルは非常に簡単と申し上げたのですが、サーフィンよりも耳の聞こえない方が気軽にできるスポーツとして、デフ協会みたいなものもできているくらい、盛んに行われています。

那須さんにお話ししたかったのは、我々の年1回、茅ヶ崎で行っている大会においては、競技説明であるとか、競技の中で手話通訳の方を毎年お願いしてしまして、その中で、一緒に協働というか、ご協力いただける部分があるのかなと思って、お話しさせていただきたいなと思いました。今回の趣旨とは異なるかもしれませんが、いろいろな茅ヶ崎の中で団体双方が協力できることがあればなと思ってお話しさせていただきました。

○一般社団法人4H e a r t s（那須）

ありがとうございます。

実は、SUPの方で第一人者でもある方を取材させていただいております。「みみとこころのポータルサイト」のほうにもインタビュー取材を掲載しております。耳の聞こえない方なのですが、その方とお話ししていると、茅ヶ崎のその大会に手話通訳がついているのは、すごくまれなことで、多分そこしか手話通訳を呼んでいない。ほかは呼びたくても断られるし、筆談もしてもらえない。SUPは、結構、その日、その日でルールが変わるらしいですね。それが非常に危険。ここから向こうは行ったらだめですとか、いろいろルールが変わるので、それが手話通訳で情報保証されないというのはすごく怖いという話を聞いております。なので、手話特区構想の中でも、飲食店と先ほどいいましたけれども、海上の安全を守る。そのための手話というのもぜひ講習で教えていけたらなと考えています。

○特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン（太田）

ありがとうございます。海のスポーツなものですから、皆さまにルールを伝える仕組みは、大会ごとに毎回非常に悩むことで、もちろん手話の通訳の方というのは皆さまに好評というか、皆さまが楽しんでいただくためにはいつも必要だと思って、毎年お呼びしているものなので、今後とも一緒にそういったことに関してご意見をいただきたいですし、茅ヶ崎の中で協働できたらなと思いますので、よろしくお願ひします。

○一般社団法人4H e a r t s（那須）

ぜひよろしくお願ひします。

○山田委員長

ありがとうございます。

まず、1つ目のテーマが、団体間の横のつながりの期待が非常に高いということがわかりました。ありがとうございます。

続いて、松本さん、よろしく申し上げます。

○ふらっと茅ヶ崎（松本）

今日は本当にありがとうございました。今日、いろいろとお話を聞いていて、連携していけたらいいなというのをすごく感じました。子どもなので、海の遊びもできたらいいし。那須さんの活動も当事者活動としてすごく近いものを感じたのですね。コツコツと、というのもあるし、あとは、私たちも障がいのある方と接する機会がなくて、それがすごく、要は、みんな分断されてしまったではないですか。この何十年間。耳の悪い方はこちら、みたいな。親がいない子は施設にというような感じの分断がいっぱい行われてきたけれども、これからの世の中は、そうではなくて、お互いを知って寄り添い合うとか、共有し合うとか、そういう時代だなというのは思うので、分断から協調とか、そういう場として、南湖ハウスにも来ていただいて、一緒に、みんな文化を持っていると思うのです。例えば、ピアノができるとか、お茶を立てるのが得意とか、そういうものでつながり合っていて、そういう理解が足りなかったのだねとか、そういうことができていくと、もっと茅ヶ崎が温かいものになっていき、茅ヶ崎という、このコミュニティがみんなの幸せにつながるのだよという発信ができれば、すごく素敵な国になっていくのではないかなと思うので、大きな夢を持ちながら、最後のWebサポーターのセカンドワークさんの協力を得ながら、発信の仕方を一緒に実践していくというのがいいなと思って、今度、次の一步の会議ができればいいなと思いました。以上です。

○山田委員長

ありがとうございます。

今、お話の中でご指名がありました四條さん、何かセカンドワークからリプライなどがありましたら。いかがでしょうか。

○NPO法人セカンドワーク協会（四條）

非常に光栄であります。お声も今いただきまして。

我々も、社会課題を解決されている市民活動団体様の活動を支援する、そこを通じて、結果的に社会課題の解決の役割を果たしているということで、それがすごく今実感できました。

あと、もう一つ言えば、実は昨年度もこういう場に出ていますが、昨年度は、プレゼンの時間しか出られなかったのですね。ただ、こういう場があって、プレゼンされる方々の情報交換ができるというのはすばらしいなと思っていて、これはぜひ来年度も続けていただけるといいかなと。ですから、コロナはまずいですけれども、こういうチャンスがあったというのは、すごくメリットがあるなと感じています。ありがとうございます。

○山田委員長

ありがとうございます。

ちなみに、昨年、細切れになってしまったのは、たしか、今年と同様にウイルス対策で、長時間会場に滞在していただかないようにということで、むしろ昨年のほうが珍しかったということです。

例年、このような総括は行っているのですが、昨年だけそれがかなわなかったということなので、今年は2年ぶりにできたというのは、皆さまの期待感が非常に高まったということもありますし、自治体の市民活動げんき基金補助事業のプレゼンテーションならではのつながりというのをさらに期待されていることも確認させていただきまして、ありがたい情報かなと感じました。

これに関連してでも、他のことでも結構ですが、続いて、どうぞ何か感想でもご質問でもありましたら、お話しいただければと思いますけれども、いかがでしょうか。

川上さんは挙手をなさっているのでしょうか。お願いいたします。

○わんにゃんマルシェ実行委員会（川上）

四條さんにお聞きしたいのですけれども、今回、うちもホームページを作るということで、四條さんのところをお願いしようかなと思っているのですけれども、ホームページを作成してもらって、その後、持続的に運営していくというところで、セカンドワークさんの、運営のサポートとかというのはどのように考えていらっしゃるのでしょうか。

○NPO法人セカンドワーク協会（四條）

もちろんそのIT伴走がポイントなので、それはずっとやらせていただきます。今、那須さんのサイトも、毎月1回、打ち合わせをしながら、どういう方向に進めるのだということを那須さんから教えていただきながら、我々の理解を深めるというのが1つと、あと、こういう原稿をアップしたいのだということを、チャットワークというITのサービスがありまして、そこでポンと投げさせていただくと、我々のメンバーがそのサイトにアップするというようなことを続けています。

○わんにゃんマルシェ実行委員会（川上）

では、こういうことを更新したいのだよというところの相談までもやっていただけるといい。

○NPO法人セカンドワーク協会（四條）

そうですね。普通は、Webのホームページ屋だと、保守運用費みたいなのをある程度多額に取るのですが、少額なのですがそこは少しいたいて、それをうちの中で実際に作業してくれたメンバーに流すということはやっておりますが、非常に少額でやらせてい

ただいています。

○わんにゃんマルシェ実行委員会（川上）

わかりました。ありがとうございます。

○山田委員長

ありがとうございます。

秦野委員が先ほど手が挙がっていたようなので、どうぞお願いいたします。

○秦野委員

今のセカンドワーク協会様のお話の流れで、私は、今日の感想なのですが、Webサポーターの育成事業のPRというのがとても重要になるのかなと感じました。もしできれば、市民活動げんき基金補助事業の助成団体さんがチームとなってこれをPRしていくということもできたらいいのではと思います。

というのも、今回、提案団体さんのホームページをかなりセカンドワークさんが制作をされるということなので、今年の市民活動げんき基金補助事業は、私、セカンドワークさんが肝ではないかなと。Webサイト制作にかかわる人が増えると、おそらく活動していらっしゃる団体さんへの理解というのも自然と深まったり、また、それに伴って情報発信が市内とか日本とか全国に広まっていくことにもつながると思うので、それが団体の力の底上げにもつながれば、より茅ヶ崎の市民活動が発展すると思うので、もし皆さまが採択されたときには、みんなで協力し合って、人づくりといいますか、プレイヤーをふやしていけるといいのかなと思いました。すいません、感想でした。以上です。

○山田委員長

ありがとうございます。

今の秦野委員のご発言、ご提案について、皆さまから何かリプライはありますか。どうでしょうか。よろしいですか。那須さん、どうぞお願いします。

○一般社団法人4Hearts（那須）

すごく団体さんのほうにはいろいろとお世話になっております。特にセカンドワークさんの中で、一番自分たちも取り入れたいなと思っているのが、シニアの方々と現役層の方々がコラボレーションして、そこでどちらも事業を生み出している、本当に三方よしの状態でやっているというところがチームづくりとして私たちも学びたいなと思っているところで、もし今後よろしければ、チームづくりについてもお話いただければ、自分たちの参考になるなと思います。

○NPO法人セカンドワーク協会（四條）

わかります。ありがとうございます。

○山田委員長

ありがとうございます。

津金さん、挙手されていますか。よろしくお願いします。

○一般社団法人4H e a r t s（津金）

セカンドワークさんですけれども、ホームページづくりにかかわっていただく中で、聴覚障がいについてというところからの理解をしていただいて話し合い、いつも寄り添っていただいています。ありがとうございます。そういう結果の4H e a r t sの「みみとこころのポータルサイト」がすごくいいものになっているのと思いますので、皆さま、ごらんください。よろしくお願いします。

○山田委員長

もう、多分かなりの方がごらんになっていると思いますので、また改めて見ていただければと思います。

では、続きまして、どうぞご発言ありましたらお願いいたします。いかがですか。

もしなければ、少し聞いてみたかったのは、今回、スタート支援の団体の方で、例えば、市民活動げんき基金補助事業が地元の自治体にあるというのは、それを受ける、助成を受ける皆さまの側としては、どのようなよさですとか、ラッキーというか、助かったというような印象ですとか、この仕組みがあることについてどういうふうにお感じになっているかというのをご紹介いただけるとありがたいのですけれども、高村さん、いかがでしょうか。

○ママほぐ（高村）

市民活動げんき基金補助事業のことは、ママほぐを支援してくださる団体さんから教えてもらって知って、今回、応募させてもらったのですけれども、まず、昨年度の要項を見たときに、このような団体さんがたくさんいるのだというところが、まず、バーッと見ていて思って、市民団体をやっていて、横のつながりがない団体だったりとかすると、自分たちが一人で頑張っているという思いが強かったりして、やっていて、例えば、赤字が続いたりとかすると、どんどん、ああ、どうしよう、どうしようというところが自分たちもあったのですけれども、このように頑張っている団体さんが市内にこれだけあったのだなというところを感じたというのがまず1つと、あとは、寄附してくださる人たちがこのようにいてくださって、すごく温かい思いで運営されている基金であるなと思いました。

いろいろな助成金だったりとか基金が全国的にもあると思うのですけれども、どの団体

もそうだと思うのですが、私も茅ヶ崎で生活していて団体活動をしていくという中で、自分たちは子育てをしているので、自分たち自身も支援される立場ではあるのですが、それをさらに支援してくれる基金があって、それが地元であるということは、何にもかえがたいというか、ありがたいことだなと思っています。

○山田委員長

ありがとうございます。指名をしてしまいましたすみません。

他に市民活動げんき基金補助事業の制度ということに対する感想をお持ちの団体がいらっしゃるでしょうか。よろしいですか。

特になければ、次の質問も実は聞きたいことがありまして、今回、皆さまの報告を伺っていますと、とりわけコンテンツですよね。発信したいメッセージというのは非常に強く感じる場所がありまして、同時に、そういった活動を通して、みずからの団体をよりよく積極的に成長をさせていきたい。つまり、メッセージの中身の整理だけではなくて、団体もよりよく成長して、さらに地域で活動できる。様々なことをよりよく発信できる団体に成長させていきたい、こういう熱意がとても伝わってきた貴重なプレゼンテーションをたくさん聞かせていただいたというのが率直な感想です。

こうした自団体の成長ということに対して、せっかくの機会ですので、このように今回の市民活動げんき基金補助事業を使って発展、成長させていきたいという。四條さんには質問の中でしてしまいましたけれども、ぜひこういったところをお聞かせいただけると、私たち委員もさらにやりがいがありますし、評価もしがいが出てくると思いますので、この辺、お考えのところがありましたら、聞かせていただきたいと思いますが、いかがでしょうか。どの団体でも結構ですので、お知らせいただくとありがたいです。いかがでしょう。

那須さん、お願いいたします。

○一般社団法人4H e a r t s（那須）

特に神奈川県というと、やまゆり園の悲劇がありましたけれども、それによって、神奈川県憲章で「ともに生きる」ということを掲げておりますが、今年4月から、茅ヶ崎ではパートナーシップ宣誓制度も始まりますし、そういったことも含めて、多様性のあるまち、応援し合うまち、そういうところを目指していけるかなというふうに私たちも思っていて、それをやりたいと思ったときに、こういったサポートの市民活動げんき基金補助事業というものがあるというのは、取りかかりとして始める、スタートアップとしてすごくいいなと思っています。

私たちは、障がい福祉と捉えるのではなくて、ちゃんとビジネスとして形にしていこうと思っていて、そこを狙っていくというところで、これは市民のお金ではないですか。だからこそ、それを使うことによって、市民に還元して、それを市民みんなが生きやすく

なる、そういうところにつないでいく。それがさらに自分たちの活動も発展していくという感じで、いい循環になっていくというのがすごくいいなと思っています。

○山田委員長

ありがとうございます。

どうでしょう、他には。感想でも、また別の質問でも結構なのですが、よろしいですか。では、川上さん、よろしくお願いします。

○わんにゃんマルシェ実行委員会（川上）

自分たちの団体の成長という意味とかぶるのかなとは思いますが、今、私たち実行委員とイベントを開催するときに、ほとんどボランティアの方を募って、その人員で回しているような感じなのです。今、自分たちが訴えたい気持ちだったりとか、動物愛護ということに関して、もっともっと市民の方とかに広まってきて、そこから一緒に参加してみたいわとか、一緒にそのイベントをやってみたいわとか、ボランティアでもいいから何かお手伝いしたいわという人がもっともっと増えてくれると、動物愛護の考え方の広まりというのも市民の方たちの中にもっともっと広がっていくのではないかなと思って、それは今後の自分たちの動きにもかかわってくることだなとはすごく感じています。

○山田委員長

ありがとうございます。

では、予定の時間がまいりましたので、総括質疑は以上とさせていただきます。皆さまいろいろご発言くださり、ありがとうございました。

では、一旦事務局に進行をお返ししたいと思います。ありがとうございました。

○事務局

総括質疑、ありがとうございました。これでヒアリング、プレゼンは終了になりますので、山田委員長より最後に一言、閉会のご挨拶をいただけますでしょうか。

○山田委員長

承知いたしました。

では、これと前後して、今後もマッチング方式を継続してほしいと思いますという感想をいただきました。ありがとうございます。

では、最後の委員会からの挨拶ということで、私、代表して皆さまにご挨拶申し上げたいと思います。

今日は、半日という時間でしたけれども、皆さま、ご協力、ご参加くださりまして、ありがとうございます。改めまして、非常に素晴らしい取り組み計画、その後の総括質疑が、

当初はこういうオンライン形式でしたので、どのようになるかなと思っていたのですが、積極的にご協力、ご参加くださりまして、大変実りの多い質疑になったのではないかと感じました。

少し余談というか、雑談なのですが、私、大学に勤めていまして、学生相手に授業をしていると、「最後に質問ありますか」と言うと、5分くらいシーンとなるので、そういうふうにならずに、皆さま発言くださったということは、大変うれしかったですし、こういう市民の方々の活躍が、これから本当に茅ヶ崎に市民活動げんき基金補助事業の形で浸透していくというのは、これもまたすばらしいことだと思いますし、ますます茅ヶ崎がよりよいまちに変わっていくきっかけ、そういうヒントをいただけたようにも感じました。

この後、委員会といたしましては、皆さまのご発表、申請の内容をさらに検討させていただきまして、審査のプロセスにこれから入っていくことになります。もちろん厳正に審査をいたしますが、今日の皆さまの熱意というのは、それぞれの委員の思いにも重なりながら、確実に伝わったと、自分自身がそういうふうに感じましたので、実感があります。こういったことを踏まえて、皆さまの活動を検討させていただきたいと考えております。

同時に、委員会の紹介で少し恐縮ですが、現在、市民活動推進委員会では、事務局の提案のもと、市民活動げんき基金補助事業とこれからの協働のあり方、茅ヶ崎市の中における協働のあり方を検討している最中です。つまり、自治体の役割、市民活動の役割、それから、市民とか企業も含めて事業者の取り組みというのをどのように協働させていくことが茅ヶ崎市をよりよいまちにしていくのかという点、検討を進めてきまして、近々これを市長に向けて提案をさせていただくという準備が一通り終わったというか、終わりつつある。これから答申をしていく段階に入っています。

この議論の中で委員が積極的に発言をしてきたのは、今日、皆さまがまさに提案をしてくださいました横のつながり、学び合っただけでなく、団体の力を蓄えていくという協働のあり方、それから、様々なテーマが、自分のところは気づいているのだけれども、自治体が気づいていないとか、市民が考えているものがなかなか事業化できていかない悩みなどをどのように結びつけていくのかといったようなテーマ提案、課題提案の仕方、情報蓄積や情報発信のあり方、そういったものをさらに市民に広げていくような会員獲得なり、片や、究極のゴールとしてのアドボケイトを事業化していくといったような内容です。こうした議論をずっと続けてきたのですね。

これらが、市民活動げんき基金補助事業に申請をしてくださる団体の皆さまが共通に考えてくださっていること、共通に悩みに思っていること、これを何とかしたいと考えていらっしゃるということ、最後の総括質疑でもさらに確認できたということは、委員会のこれからの検討にも非常に大きな意味を持っておりまして、同時に、今回の提案がそういうところに向けて市長に提案しようと思っている内容と重なるところが多分にありました。この辺では逆に申請をしてくださった皆さまから、委員会活動を励ましてく

くださったのと同時に、もっと頑張れと激励をしてくださったのではないかなと感じるところもありまして、感謝を申し上げたいと思っております。

近々私たちの答申は市長に向けてメッセージを出します。これからますますこうした市民活動げんき基金補助事業の活用、そして協働をするまちづくりという未来に向けて、きちんと市と市長に届けていきたいと思っておりますので、皆さまも引き続きこの活動に向けてご協力をいただければなと思っております。

少なくとも、今回、この6団体の皆さまの発表を通じて、茅ヶ崎に本当に底力があること、それから、これがつながっていくということを通して、ますます茅ヶ崎には様々なパフォーマンスの原動力があるということが確認できましたので、私たち市民活動推進委員会としても、この力を弱めるような、ブレーキをかけていくような委員会ではなく、積極的にアクセルを踏んでいけるような委員会として頑張りたいと思います。この決意を胸に、皆さまの評価と採点をいたしまして、市長に採択の提案をこれから検討してまいりたいと思います。

以上、決意も含めまして、皆さまへのお礼も含めまして、ご挨拶を申し上げます。

私からの話は以上とさせていただきます。今日は皆さまありがとうございました。

○事務局

山田委員長、ありがとうございました。また、参加された皆さま、ありがとうございました。

以上をもちまして、令和3年度実施茅ヶ崎市市民活動げんき基金補助事業公開ヒアリング及び公開プレゼンテーションを閉会いたします。

令和3年度実施事業につきましては、市民活動推進委員会による評価結果を受け、最終的に市長が決定します。採択・不採択等の結果につきましては、事業提案団体の皆さまに4月下旬ごろ、書面にてご連絡するとともに、市ホームページ等でも一般の方々に公表してまいります。

また、会場出口にて市民活動げんき基金の募金箱を設置しております。会場にいらっしゃる皆さまにつきましては、お帰りの際にご協力をいただけると幸いです。

本日は、長時間にわたりましてご協力いただきまして、ありがとうございました。